## （２）調査成果

**江戸時代前期と後期の建物**　十字に設定した調査地で、まず建物跡の遺存状態を確認しました。調査地の中央北側に、南西～北東方向に並ぶ江戸時代後期の大型な礎石抜き取り穴６基と、その西端南方に同様の抜き取り穴１基を確認しました。長径 1.5m、短径 1.2m 程の大きな穴を掘り、その中を突き固めて礎石を据えるための地業を行った痕跡が認められます。これは文化 13 年(1816)に建てられた本堂の北辺と西辺の一部の側柱列であると考えられます。

その約 3m南には、江戸時代前期の礎石抜き取り穴と考えられる土坑5 基を検出しました。北側の抜き取り穴列とは年代も方位も異なり、延宝７年(1679)に建てられた仮御堂の柱列と考えられます。礎石は江戸時代後期の本堂同様に、すべて失われていました。

江戸時代後期の本堂は、鎌倉時代の本堂の指図（建築図面）をもとに復元すると、北辺の側柱列の東方や、南の礼堂は、本堂の大部分が乗る平坦面からはみだしてしまいますが、西側の地形が高かったことは『男山考古録』にも書かれており、江戸時代後期の絵図では堂の東に石垣が描かれています。石垣は明治初年の破却時に礎石とともに取り除かれたようです。

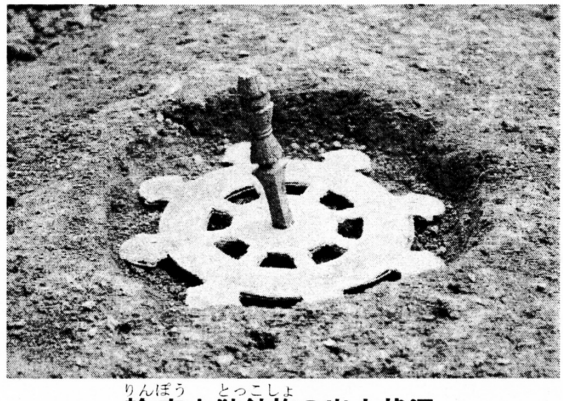
**密教の祭祀跡**　江戸時代後期の本堂柱列の内側に、小坑の底部に密教法具の「輪宝」を置き、その中央の方形小穴に「独鈷杵」を突き立て埋納した遺構を、現時点で６基検出しました。その小穴は江戸時代後期の整地層上面から掘り込まれており、本堂と南北中軸線を共有していることから、江戸後期の本堂再建時に埋納されたと見られます。再興時のモデルと理解される鎌倉時代の護国寺指図の柱位置から考えると、中央の須弥壇を取り囲むように、八方に配置されたと推定できます。

輪宝を下に置き、橛という杭状の法具を突き立てる方法は、天台密教の修法で、地鎮や鎮壇を行う「安鎮法」にみられ、橛を先に置き輪宝を上から突き立てる真言宗の修法とは区別されます。

真言宗では、堂舎の建立前に、五宝などを納めた瓶を五色の糸で結んで埋め、建立後に輪宝８枚と橛８本を鎮壇の八方にそれぞれ埋めるとされています。発掘調査での出土例も真言宗の修法で行われたものが多く、興福寺、石山寺、金剛峰寺など８例ほどが知られています。

一方、延暦寺を中心に行われた天台宗の修法は『阿娑縛抄』などに詳しい記載があります。掘った穴の底に紙や絹を敷き、その上に輪宝をおいて、中央の穴に橛を立て、その頭を鎚で何度も打ち叩き、金・銀・瑠璃・珊瑚・瑪瑙・真珠・琥珀の七宝や五穀などを散じて埋める例などが記録されています。天台宗では、八方に輪宝・橛を埋納する修法は「安鎮家国法」とされ、鎮護国家を祈念して行われるものです。出土例は、平安時代中期後半の平安宮内裏跡、江戸城本丸跡などごく少数です。「安鎮家国法」は壮大な儀式であり、大寺院でしか修せられないものだったのです。

今回の出土例は単なる地鎮ではなく、この安鎮家国法による修法が行われたものと見られます。しかし、橛の代わりに独鈷杵を用いた例は、文献史料、出土例ともに他にありません。外国船が日本に来襲し始めたこの頃、国家を護る願いをより強いものとするため、独鈷杵が用いられたのでしょうか。謎は残りますが、京都の鬼門（北東）の守護した延暦寺と、裏鬼門（南西）に位置し八幡大菩薩を祀る石清水八幡宮が、手をたずさえて王城＝京都を守護してきたことを示す発見といえるでしょう。



**輪宝と独鈷杵の出土状況**